

# ブラジル北東部セルタンの貧困と女性像

— ハケウ・ジ・ケイロス『1915年』の一考察 —

江 口 佳 子

Poverty in the “Sertão” of Northeast Brazil and the  
Representation of Women  
: Rachel de Queiroz, *O quinze*

Yoshiko EGUCHI

2018 年 11 月 9 日受理

## 抄 録

本稿は北東部地方主義文学を代表する作家であり、ブラジル文学における女性作家の地位を確立した女性作家ハケウ・ジ・ケイロス (Rachel de Queiroz, 1910-2003) の『1915年』(*O quinze*, 1930年)を考察するものである。本小説は、1915年にブラジル北東部のセアラ州のセルタン (奥地)<sup>1</sup> で起きた旱魃を題材としている。作家ケイロスは、旱魃が生み出す国内移民という人的被害や、不公正な政治・社会構造を問題提起する。また、女性の自己実現を阻む北東部の家父長社会や、伝統的な役割を内面化する女性の状況を批判的な視点で捉え、他者に支配されない主体を持つ、新しい女性像を模索している。

キーワード：ブラジル文学、ブラジル北東部、家父長社会、ハケウ・ジ・ケイロス、女性

## 1. はじめに

1822年にポルトガルから独立したブラジルにおいて、自国の文学が成立するのはロマン主義期 (1836～1881年) であった。そして、国の近代化に伴い、ヨーロッパの模倣ではなく、ブラジルらしさを模索した第一期モデルニズモ (1922～1930年) を経て、国内の社会問題に向き合う第二期モデルニズモ (1930～1945年) が起こる。この文学運動は、19世紀半ばからコーヒー産業が栄え、政治・経済・文化の中心となったサンパウロ州やリオデジャネイロ州などの南東部からは、離れた北東部などの地方で起き

---

<sup>1</sup> sertão: ブラジル北東部に広がる乾燥地帯

た。それゆえ、地方主義文学と呼ばれるが、とりわけセアラ州やバイーア州を中心とした北東部の文学作品群が重要と評価されている。北東部は植民地期（16世紀～1822年）には、奴隷制を基盤とした砂糖産業が盛んとなり、ブラジル経済の中心であった。しかし、19世紀初めになると、より安価に砂糖を生産したカリブ海諸国に国際市場での地位を奪われ、北東部の経済は斜陽の一途をたどる。こうした社会経済情勢を背景に、地方主義文学の特徴は、植民地期以来の家父長的社会構造の歪みと早魃等の厳しい自然環境がもたらす貧困問題が主たるテーマとなった。

北東部の地方主義文学は、南東部の経済的發展に比して衰退した北東部の砂糖産業の様子を描いた1928年発表のジョゼ・アメリコ・ジ・アウメイダ（José Américo de Almeida）の『サトウキビの搾りかす置き場』（*A bagaceira*）をもって始まったとされている。他の代表的作家では、ジョルジ・アマード（Jorge Amado, 1912-2001）、ジョゼ・リンス・ド・ヘーゴ（José Lins do Rego, 1901-1957）、グラシリアーノ・ハモス（Graciliano Ramos, 1892-1953）がいるが、ハケウ・ジ・ケイロス（Rachel de Queiroz, 1910-2003）は唯一の女性作家であり、本稿で採り上げる『1915年』（*O quinze*, 1930年）は、作家が弱冠二十歳の時に発表したデビュー作である。

ケイロスはブラジル北東部のセアラ州フォルタレーザで生まれ、幼少期を過ごす。1915年のセアラ州の早魃が原因で、家族とともに、1917年にリオジャネイロとパラ州のベレンで2年間を過ごすが、1919年に再びフォルタレーザに戻る。15歳で中等教育を終えると、17歳で小学校の教員になり、同時に新聞社でも働いて、筆名で記事を掲載していた。その後、1930年に上梓した小説『1915年』は、最初の発行部数は1,000部であったが、リオデジャネイロやサンパウロの文壇で評価され、二十歳にして、ブラジル文学における女性作家の地位を確立した。グラシリアーノ・ハモス<sup>2</sup>は、アメリコ・ジ・アウメイダの『サトウキビの搾りかす置き場』が登場するまで、北東部には文学は存在していなかったと評価した上で、ケイロスの『1915年』について次のように述べている。

*O Quinze* caiu de repente ali por meados de 30 e fez nos espíritos estragos maiores que o romance de José Américo, por ser livro de mulher e, o que na verdade causava assombro, de mulher nova. Seria realmente de mulher ? Não acreditei. Lido o volume e visto o retrato no jornal, balancei a cabeça:

Não há ninguém com este nome. É pilhéria. Uma garota assim fazer romance ! Deve ser pseudônimo de sujeito barbado<sup>3</sup>.

『1915年』は1930年の中頃に突如現れ、それが女性の手による本であったゆえに、ジョゼ・アメリコの小説以上に心に後遺症をもたらしたが、実を言うと、若

<sup>2</sup> 代表作『乾いた生活』（*Vidas secas*, 1938）

<sup>3</sup> Ramos(1989), p.133

い女性が書いた本であったがゆえに、驚きをもたらした。私は信じなかった。その作品を読み、新聞に掲載された写真を見て、首をひねったのだ。

こういう名前の人物は存在しない。冗談だ。このような小娘が小説を書くなんて！ 髭を生やした男の筆名に違いない。

ハモスの言葉は、『1915年』の文学的な質の高さを評したものであるが、最初に読んだ時の印象を「男性が書いたもの」ではないか、女性がそのような作品を書けるはずがないと、ケイロスの稀有な才能に驚きを示している。この作品が発表された1930年代といえば、おりしもヨーロッパで第一波フェミニズムが起こり、男女同権を求める運動がブラジル社会にも影響を及ぼしていた時代である。ケイロスは自身がフェミニストであることを否定しているが、『1915年』は二つの点において、社会への女性の参入を模索した作品であり、当時の女性解放運動の影響を少なからず受けていたのではないかと考えられる。一つ目は、女性主人公が自ら職業を持ち、男性に依拠することなく自立して生きる道を模索するという物語であること。二つ目は、それまで男性作家のみに限られた社会問題を扱っており、男性作家が中心であったブラジル文学界に女性作家が参入する試みであったからである。

『1915年』の物語は、二つの挿話が交差しながら展開する。一つは、男性優位の社会における若い女性教師の結婚問題であり、もう一つは、過酷な自然環境で貧困に苦しむ家族が北東部のセルタン（奥地）から都市部へ国内移住する話である。本稿では、この二つの挿話を概観し、小説『1915年』による作家ハケウ・ジ・ケイロスの女性の自立の試みについて考察する。

## 2. 家父長社会と女性

物語の契機となるのは、1915年にセアラ州の早魃である。冒頭は、女性主人公コンセイサン（Conceição）の祖母イナシア（Inácia）が、雨が降ようノヴェナ<sup>4</sup>の祈りをしている。22歳のコンセイサンはフォルタレーザ<sup>5</sup>で小学校の教師をしているが、既に両親が他界しているため、内陸部のセルタン（奥地）にあるログラドウロ（Logradouro）という小さな町の農場で一人暮らしをする祖母を休暇の度に訪れては、数カ月間を一緒に過ごしている。コンセイサンは18歳で教師となったときに、結婚の意思がないことを祖母に伝えている。祖母は、結婚しない女性は社会から“欠陥者（aleijão）”の烙印を押されると懸念し、結婚して子供を産むことが女性の幸せであることを何度もコンセイサンに対して説得する。コンセイサン自身も、結婚の意思について何度も自問する。コンセイサンは進むべき道を、読書を通じて模索する。彼女が祖母の家に滞在する理由は、既に死去した祖父が残した書籍を自由に読むことができるからであった。自由主義思想の持ち主であった祖父の書斎には、フランスの思

<sup>4</sup> ノヴェナ（novena）：カトリックの信者が、神に特別な願いを聞き入れてもらうために、連続して九日間の祈りを唱える。

<sup>5</sup> Fortaleza: セアラ州の州都

想家<sup>6</sup>の本など、彼女の思考を深める多くの書物が保管されていた。女性が男性の書斎で過ごすというモチーフは、女性の自立心を表象するものとして、度々女性文学においては描かれてきた。しかし、その読書がまさしく、コンセイサンを女性として歩むべき道から逸脱させる要因になるとして、祖母は彼女の読書を快く思っていない。

〔引用1〕(Queiroz(1993), p.10)

Chegara até arriscar em leituras socialistas, e justamente dessas leituras é que lhe saíam as piores das tais idéias, estranhas e absurdas à avó.

Acostumada a pensar por si, a viver isolada, criara para seu uso idéias e preconceitos próprios, às vezes largos, às vezes ousados, e que pecavam principalmente pela excessiva marca de casa.

社会主義者の本まで読むという危険を冒していたため、そうした読書のせいで、祖母にとっては、不可解で、馬鹿げているように思われる最悪の考えが生じていたのだ。

一人で考えること、孤独に暮らすことに慣れ、自分のために、時には寛大で、時には大胆な考えや先入観を生み出していたため、家で度が過ぎると非難されていた。

知識を獲得するにつれ、コンセイサンは祖母や周囲の男性、同年代の若い女性との間に溝を作ることになる。コンセイサンにはヴィセンチ (Vicente) という年齢の近い従兄がおり、幼少期から二人は惹かれ合い、祖母や親戚も二人の結婚を望んでいた。ヴィセンチは農園主の息子であり、農場を拡大することに熱心で、セルタンの大地での生活に専心し、町に住む恰好つけたがりの若者たちとは対照的に、一日中馬に乗って過ごす粗野な若者であった。北東部セルタン地域では、度々襲う旱魃が農場の家畜に被害をもたらすため、日々その対応に追われている。ヴィセンチの家族想いの優しさ、快活さ、逞しい肉体は町の娘たちの羨望を受けていた。コンセイサンは、ヴィセンチと土地の結びつきに敬意を払うが、ヴィセンチの生きる世界は、町や農場という限られた空間であることに気づいており、読書により見識を高めるにつれ、学問に無関心なヴィセンチへの物足りなさや距離を感じるようになる。

〔引用2〕(Queiroz (1993), p.78)

Foi então que lembrou que provavelmente, Vicente nunca lera o Machado...Nem nada do que ela lia. Ele dizia sempre que de livros, só o da nota do gado...Num relevo mais forte tão forte quanto nunca o sentira,

---

<sup>6</sup> マックス・ノルダウ (Max Nordau, 1849-1923, ハンガリー出身) やジョゼフ・ルナン (Ernest Renan, 1823-1892)

foi-lhe aparecendo a diferença que havia entre ambos, de gosto, de tendências, de vida.

O seu pensamento, que até há pouco se dirigia ao primo como a fim natural e feliz esbarrou nessa encruzilhada difícil e não soube ir adiante.

ヴィセンチがマシャード<sup>7</sup>の作品を読んだことがないということを思い出したのはその時だった。彼女が読んだものさえ読んだことがないに違いない。彼にとって本というと、家畜の証書のことだといつも言っていた。そのことがより強く、それほど強く重要なこととして、彼に対してかつて感じたことはなかった。二人の間にある好み、傾向、生き方の違いが彼女の中に芽生えた。

少し前までは、自然で幸せな結末は彼にあるという彼女の考えは、難しい交差点にぶつかり、前に進むことができなくなった。

ヴィセンチは、コンセイサンに対しては、他の女性のように他愛もない会話で日々を過ごし、着飾ってパーティー等を楽しむことを望んでいた。一方、ヴィセンチは社会階層の低い混血女性たちと、抵抗なく性的関係を結んでおり、そのことに、コンセイサンは内心穏やかではなかった。それに対して、祖母は、それはセルタンの白人男性にとって普通であり、相手女性が黒人女性ではなく混血女性なのだから良いのだと、ヴィセンチを擁護さえする。

コンセイサンは社会通念に疑問を呈し、当時の女性に相応しいとされる考えを持たないため、祖母を初め、ヴィセンチの家族から特異な存在として見られる。しかし、コンセイサンは反発するだけでなく、何か別の事をしなくては人生が空しくなると考える。祖母は、女性の資質（natureza）に反発せず、周囲から望まれる結婚をして、伝統的な女性として生きることをコンセイサンへ助言する。コンセイサンは周囲との摩擦を感じながらも、目の前のセルタンの現実や貧困に対して問題意識を持ち、行動を起こす。そうして、彼女の行動は、作品中の二つの挿話を結びつけていく。コンセイサンは学校での仕事以外に、早魃から逃れてきた人々の支援活動にも従事するようになる。

〔引用3〕（Queiroz (1993), p.127）

Conceição passava agora o dia inteiro no Campo de Concentração, ajudando a tratar, vendo morrer às centenas as criancinhas lazentas e trôpegas que as retirantes atiravam no chão, entre montes de tropas, como um lixo humano que aos poucos se integrava de todo no imundo ambiente onde jazia.

コンセイサンは、今では収容所で一日を過ごすようになった。治療を手伝い、

<sup>7</sup> ブラジル文学アカデミーの創設者の一人であり、初代会長に就いたブラジルの文豪マシャード・ジ・アシス(Machado de Assis, 1839-1908)

何百人もの飢えた、病気の子供たちが死んでいく姿を見た、旱魃から逃れた人々は、すべてが徐々に不潔な環境の中に統合されていく人間の廃棄物のような群れの中で、子供たちを地面に放置していた。

物語の最後には、ヴィセンチが別の女性と結婚することが言及され、コンセイサンは独身のまま教師として働きつづけることを決意し、旱魃から逃亡した家族の子供を養子にして育てる姿が描かれて終わる。『1915年』では、カトリック教会の教えや慣習を規範とする祖母や、女性の幸福は経済的に安定した男性の庇護下にいることと信じて疑わない若い女性たちが、コンセイサンと対比される。ハケウ・ジ・ケイロスは1930年当時のヒエラルキー化した家父長社会において、伝統を内面化せざるを得ず、他者に囚われて、自由に考え、行動することができなかった女性の状況を問題化し、批判的な見解を示している。社会で声として表れなかった女性の言葉を集め、ステレオタイプでない新しい女性像をコンセイサンを通して描いたのである。

### 3. 北東部の旱魃と国内移民

物語におけるもう一つの挿話は、シコ・ベント（Chico Bento）とその家族の物語である。シコ・ベントは、ヴィセンチの知り合いの農場で働く牛飼（vaqueiro）であったが、旱魃により、牛を十分に飼育することができなくなり、農場主から、牛を捨ててくるよう命じられる。シコ・ベントは、やせ細った何十頭もの牛を乾燥して灰のようになった荒地に放った後、農場を解雇される。シコ・ベントは、識字があり、他の牛飼たちよりも農場主の信頼を得ていたが、旱魃という状況においては、一介の牛飼いでしかなかったのである。彼はセルタンを去った多くの人々が、アマゾンのゴムで一攫千金を得ているという噂を聞いており、北部へ向かうことを決心する。ブラジルでは20世紀に入り都市化の進展とともに、旱魃から逃れて都市へ移住する国内移民が急増する現象が社会問題化していた。彼ら被災者を地方政府は救済せず、金権政治は汚職と腐敗にまみれていた。シコ・ベントは、列車の切符を買うために駅へ向かうが、駅員からは一カ月後にしか席はないと言われ、陸路を歩いて行くことを提案される。シコ・ベントが駅付近の知人の店に行くと、次のように言われる。

〔引用4〕（Queiroz (1993), p.30）

Na loja de Zacarias, enquanto matava o bicho, o vaqueiro desabafou a raiva:

—Desgraçado ! quando acaba, andam espalhando que o governo ajuda os pobres....Não ajuda nem a morrer !

O Zacarias segredou:

—Ajudar, o governo ajuda. O preposto é que é um ratuíno...Anda vendendo as passagens a quem der mais...

Os olhos do vaqueiro luziram:



—Por isso é que ele me disse que tinha cedido cinquenta passagens ao Mathias Paroara !

ザカリアスの店で、彼が牛を殺している間、牛飼いは怒りをぶちまけた。

「何てこった！無くなったら、政府は貧しい者を助けるとふれ回るが、死ぬことさえ助けてくれやしない」

ザカリアスは小声でささやいた。

「政府は助けることは助ける。しかし、政府の代理人はネズミのような奴らだ。より多く払う者に切符を売っているのさ」

牛飼いの目が光った。

「だから奴はマチアス・パロアラに五十枚の切符を譲ったと言っていたのか！」

シコ・ベントは列車での移動を断念して、妻、義妹、四人の子供たちと州都フォルタレーザを目指して荷車で荒地を進む。道中で、空腹と疲労から、長男がジプシー集団と逃亡してしまう。さらに、別の息子が毒性の植物を食べて亡くなり、義妹は口減らしのために身売りする。シコ・ベント一家の苦難は、次のように淡々と描写される。

〔引用5〕(Queiroz (1993), p.54)

A criança era só osso e pele: o relevo do ventre inchado formava quase um aleijão naquela magreza, naquele couro seco de defunto, empretecido e malcheiroso.

子供は骨と皮だけだった。膨らんだ腹は、痩せていることを目立たせ、黒くなり、悪臭のする乾いた皮袋の棺のなかで、ほとんど不具者のようであった。

その後、一家はある町へ辿りつくが、金も尽きており、路上で物乞いをするしかなかった。シコ・ベントは、貧しいながらも、かつては農場労働者であり、家も所有していた。盗人と間違えられ、強い屈辱を感じる。そして、先の見えない絶望を感じ、生きる気力さえ失っていく。しかし、偶然に出会った旧知の警察官が、一家に一時的な滞在と必要な物資を用意し、フォルタレーザ行きの列車の切符を用意してくれる。フォルタレーザに着くと、公的支援があると聞き、ヘチランチス（早魃からの逃亡者）が滞在する収容所へ向かう。そこで、ボランティアをしているコンセイサンと再会する。コンセイサンは、収容所は衛生状態が悪く、病気が蔓延しているため、シコ・ベントの滞在を世話し、一家にサンパウロへ行きの船の切符を用意する。また、彼の子供の一人を養子にして育てることを申し出る。

物語中、コンセイサン、祖母、ヴィセンチは何度も列車でログラウドロの町と州都フォルタレーザを往復する。一方で、シコ・ベントは数カ月かけて過酷な旅を経た後に、フォルタレーザに到着し、自分の故郷に戻ることなく、さらに、大都市へと向かうしか生きる術がない。ヴィセンチや農場主、権力者は、早魃が起きてもその土地を離れずに生活し続けられるが、貧困者は土地から離れることを余儀なくされる。貧し

い労働者の運命は雇用主の態度次第であり、ヘチランチスの発生は人的要素も大きい。シコ・ベントとその家族の挿話を通して、人と土地との結びつきを絶つ要因が、旱魃という自然災害と共に、不公正な社会の権力構造にもあることが示されている。

#### 4. おわりに

1930年に発表されたハケウ・ジ・ケイロスの『1915年』は、ブラジル文学思潮を刷新した作品であると評価されている。それは北東部の貧困と女性の主体という二つのテーマを、これまでの作品とは異なる視点で問題提起しているからである。ケイロスの文学的手法は、二つのテーマを繊細に編み合わせている。この作品以降、ブラジル文学では、北東部の旱魃、都市化、女性の社会進出の問題の追究が盛んとなり、深化していったと言っても過言ではないであろう。また、物語では、セルタンの厳しい環境や保守的な社会状況が、語り手による叙述ではなく、登場人物間の短い対話で描写され、ブラジル北東部の口承文学の伝統も盛り込まれている。

ケイロス は、本作品以降、1930年代に『ジョアン・ミゲウ』(*João Miguel*, 1932)、『石の道』(*Caminho de pedras*, 1937)、『三人のマリア』(*As três Maria*, 1939)の、いずれも北東部を舞台とした作品を描き、二十代にして文壇での地位を確立した。1977年には女性作家として初めてブラジル文学アカデミー会員に選出されている。1930年代の中頃に共産党に入党後の『石の道』以降は、政治色の強い作品を発表したり、軍事政権(1964～1985年)支持を公言したり、政治的立場は紆余曲折した。このため、彼女の作品に対しては様々な評価があることも事実であるが、作品を通して文学の役割を問い、次世代の女性作家たちへの道を開いたことは確かである。今後は、社会問題や女性の状況について、ケイロスの前期作品と後期作品における変化や相違点の考察を課題として取り組みたいと考えている。

#### (参考文献)

- Arrigucci Júnior, Davi. *O guardador de segredos*, São Paulo, Companhia das Letras, 2010
- Coelho, Nelly Novaes. *A literatura feminina no Brasil contemporâneo*, São Paulo, Siciliano, 1993
- Ferreira, Débora Ribeiro de Sena. *Pilares narrativos*, Santa Catarina, Mulheres, 2004
- Queiroz, Rachel de. *O quinze*, São Paulo, Siciliano, 1999
- Ramos, Graciliano. *Linhas Tortas*, São Paulo, Record, 1989
- モアズ、エレン『女性と文学』青山誠子訳(研究社出版、1978年)